
Confronts

森村芥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Confronts

【Nコード】

N6245C

【作者名】

森村芥

【あらすじ】

海に浮かぶ大きな大陸。その大陸には四つの国があった。その中の二つの国が、戦争をはじめた。片国の軍人である中島政也は戦争の激化に伴ない戦地へ赴く事となるが…

第一話：戦場へ - 1

勢いよく馬が駆けた。土煙が舞い、視界が曇る。

馬を駆る兵士が上げる掛け声が高高く響いた。空気が振動し、鼓膜が振るえる。否応なしに心臓が高鳴った。何度も息を整えようと深呼吸を繰り返すが、たいした効果も得られない。それどころか失敗を繰り返した深呼吸のせいで、更に息が上がった気すらさせた。

一度だけ硬く目を閉じ、すぐに両目をしっかりと開く。

それは時間にして一秒にも満たなかったであろう。息を吞んで体を反転させる。足が鉛のように重かった。否、足だけではなく体全体が鉄の塊にでもなってしまった様な気すらする。けれど固まっているわけにもいかない、震える両手で握ったのは突撃銃。普段は重たく感じない。それが、今は妙に腕を痺れさせた。

一、二、三……心の中でゆつくりと数を数えて息を整える。

ゆつくりと震えを隠しながら右手を上げる。ガチャリと背後から横から、音が聞こえた。振り返らなくてもわかる。これは合図なのだから……右手を上げるのがこの隊で決められた構えの合図。

前方に目を向ける。土煙が舞っている。未だ少しばかり遠い、冷静になれよと何度も自分に警報を鳴らす。距離はそういくつもなかった。駆けてくる部隊は騎兵隊。タイミングを外して、距離を詰められれば歩兵隊であるこちらの全滅は必至である。

（ああ……だからこそ緊張しているのだ）

それは死を恐れるが故か、この右手に何十もの人の命が預けられているという重荷からか……考えはじめかけて小さく首を振る。今考えることではない。この間にも騎兵隊は近づいてくる。馬の足音と心臓の音が不規則に重なり合う。早鐘のようなその音を確かに感じながら、どうか誰にも聞こえていませんように……そう願い、口内に溜まった唾を飲み込んだ。土煙が舞い、馬の樋爪の音が次第に大き

くなる。距離が詰まる。その姿が確実に銃の射程範囲内に見えたと同時に右手を振り下ろして叫ぶ。

「撃てえ!!!」

声が震えていた。だがそれは誰の耳にも聞こえてはいないだろう。右手を振り下ろすと同時に全員が構えた銃を撃ちはなった。それは折り重なりあい爆音の如く大きさを響き渡る。誰一人として銃声以外耳に残ってはいない。

一斉射撃により甲高く鳴声を発しながら馬が倒れていく様は、滑稽なものであった。兵士は制止を掛けられるまで銃を打ち続ける。それもまたこの隊の決まり事であった。撃つたびにいくつかの影が地面へと沈んでいく。指示を放った彼自らもその手で銃を構え何度も引き金を引き続けた。

その影がいくつ沈んだ頃だろうか、騎兵隊長が声を上げた。それは彼らの撤退を示すものでもあった。その言葉は確かに耳に届いていたであろう、だがそれを理解したのは彼らが射程範囲から姿を消した後だった。

「討ち方止め!」

弾かれた様に声を上げる。その声に銃声がぱたりと止まり、しんと静まり返った。ゆっくりと辺りを見渡す。誰一人として傷ついてはいない。間合いを詰められる前に撃退したのだ、当然の結果であった。そこまで理解してやっと肩の荷が下りた気がする。ため息に似た息を漏らす、本当ならばこのまま倒れこんでしまいたいのだが、それをどうにか胸の奥に押し込めて前を向く。知らず、顔がほころんでいた。

「今日もまた生き永らえた……皆、ご苦労」

海に浮かぶ大きな大陸がある。

今となつては遙か昔のこと、世界を大地震が襲い、いくつもの大陸が海の底へと沈んだ。その時唯一残ったのがこの大陸。生き残った様々な民族の人間は大陸へと集まり、その一つ一つが小さな国を作った。当初それは百以上を数えた。大陸は広い：けれどそれ以上に移住民族は多かった。そうしてそれぞれの国は自らの領地を確保する為、当然のように戦争を始めた。

大陸全土が戦火に覆われ、その戦争は何十年もの間続く。いくつもの国が消えることになった。戦争が終結を向えた時、大陸に名を残していた国は四つ。気がつけば皆疲れ果てていた。何十年にも続く戦争で命を失った人間の数は数え切れない。戦争は悲劇でしかないのだ：生き残った国はそう自らを戒め、二度と戦争が起こらないように協定を結んだ。それが武力による侵攻、略奪、干渉を禁止した『不可侵協定』である。それから数十年間、大陸の平和は続いた。それが崩れたのは：戦争を体験した人間が全て死んでしまった後だった。

大陸の東側に位置する真赭という名の国。

そこが彼の生まれ育った国だった。緑豊かな暖かい気候の国である。真赭には他国とは違った独自の文化が色濃く残っていた。例えば建築物ひとつとっても、独特である。板張りの床や木の柱、屋根瓦や畳に障子……全て他国にはない。

とは言つもののこの国自体様々な民族が混ざつてできた国であり、純粋な文化というものはないのかもしれない。色濃く目に付くものがそういったものであるだけであり、目を移せば前者に不釣り合いな建物や食べ物、小物は山のように出てくる。例えば：今現在も、袖を通す服は着物と呼ばれる物だが、その手に持つは筆でなく万年筆。左に置かれるはティーカップである。ちなみにカップの中身は珈琲なのだから、なんとも変な格好だ。

「帰って早々に報告書とは忙しい……」

誰に言うでもなく口より零れたのはため息に近い文句だった。

彼の名は中島政也、漢字と呼ばれる文字で表記するこの名前も、他国からみれば不思議なもののひとつである。この国に多い真黒な目と髪をしており、髪は眉の上で短く切られている。好戦的な印象を受ける目をしているが、どこか育ちによる品のよさも感じられた。中島が騎兵隊とのやり取りをしたのがつい一週間前の事。鎮台に帰ってくるなり命じられたのは報告書の提出であった。それから自宅に戻るなり、うんうん唸りながら頭をひねり続けている。仕舞いには机に突っ伏して目を閉じてしまった。現実逃避では何も解決しないことは解っているのだが、彼の性格からか机に向っての作業は苦手分野であり、こうして時を無駄にすることも少なくない。暫くしてぺろりと報告書の端を持ち上げてみた。真っ白である。

「ああ、もう本当に嫌だ」

勝ったのだから報告書なんて免除してほしいと思う。が、軍からすれば今は少しでも敵の情報が欲しいのだ。

戦争が始まったのはつい数ヶ月前である。真赭に戦争を仕掛けてきたのはジャリアという隣接する北側の国。本来ならば『不可侵協定』により戦争は禁じられている。だがそれは協定に参加していればという前提があつてのことであり、脱退すればその協定は効力をなくしてしまう。そう、ジャリアは協定を脱退した。

理由は定かではない、統治者である国主が代わったという噂を耳にしたことがあるが、それは理由の一端でしかないだろう。何よりもその行為にメリットを感じさせない。だからこそその本意を探れずにこちらは苦勞しているのだ。

そして他の二国はというと、『不可侵協定』を盾に見て見ぬ振りを決め込んでいた。それも間違いではないのだから何もいえない。『不可侵協定』とは自国は自国、他国は他国であり、干渉しない……そういうものでもあつた。

「軍人とはこうも面倒なものか」

言いながらも体を起こし、観念したように再び筆を手を取った。

中島の家系はそれなりに裕福であるが、軍人の家系ではなかった。彼の父も祖父も商人である。本来ならばその家業をついで商人になるはずだったのだが、中島は軍人になることを選んだ。言ってしまうと親と同じ道を歩みたくなかっただけなのかもしれない。彼がそれを決めたのは幼年学校に入学する年である十四の時だった。親が軍人ではなかった為、学費は全額払わなければならなかったが、それに関してはまったく問題はなかった。むしろ家族が揃いも揃って渋い顔をしていた事の方が問題だったような気がする。

「失礼いたします若様」

軽いノックと共に、澄んだ女の声が掛けられる。声に反応して顔を上げるが、当然の様に扉は開かれていない。

「入れ、どうした？」

そう返事を返せば扉は音もなく開かれ、そこから見知った使用人が顔を覗かせる。

「水谷様と渡瀬様がお見えになっております」

その言葉に思わず顔が綻んだ。水谷と渡瀬というのは、中島の幼年学校時代の同期で、今も交流がある数少ない友人である。

気がつけば使用人の横をすり抜け、報告書もそのままに彼等を待たせている居間へと足を速めていた。

第一話：戦場へ - 2

軽い足取りのまま居間へと続く扉を押し開けた。その音に気がついたように二人の男が振り返る。言うほど長い間会っていなかった訳ではないのだが、何故か懐かしさを覚える。

「久しぶりだな、二人とも」

軽く手を上げれば合図のように同じそれが返ってきた。

机を挟んで二人に向かい合うように椅子に腰掛ける。休暇でもとれたのかもしれない。ふと二人が私服姿な事にそんな考えが巡った。時刻はまだ正午を少し過ぎた頃、普段であれば彼らも軍服に身を包んでいるはずだったからなのだが、どちらにせよ友人を訪ねて来たのだから、それはそうだろうと思い直した。

「思いのほか元気なようだな」

向かって右に座る男が薄い笑みを向けた。

名は水谷英仁といい、中島と同じように黒い髪と眼をしている。

中島より長い前髪は後へと撫で付けられていて、顔立ちは穏やかなものだった。外見で表すならば中島とは真逆と言ってもいいだろう。

「噂には聞いていたけど、随分と巧くやっているようじゃない」
にやりと笑ったのは向かって左に座る男、渡瀬惣一郎である。

黒い髪は辛うじて真ん中で分けられているものの、寝癖ともつかないぼさぼさとした頭だった。けして意図しているものではなく、彼の髪質からきているものなのだが、初対面での印象がいいとは言いがたい。それに拍車をかけるように、渡瀬は糸目で目尻が下がっている。気が抜けた。言ってしまうば厭らしい顔つきである。少なくとも初対面の人間は間違っても彼を軍人とは思わないだろう。

「大して巧くなんてやってないさ、なんて言っただって俺は商売人の子だ。上には嫌われっぱなしだ」

中島は冗談めいて大げさなため息をついてみる。

家柄が昔から軍人だった者の中には、商売人や百姓あがりの将校

を嫌うものも少なくなかった。なりあがりと同じ位置にいること自体を、プライドが許さなかったのだろう。

「それを言ったら僕も同じだよ、第一家柄だけで考えるなら水谷はもつと昇進しているはずじゃない」

同意を求めるように首をかしげた渡瀬に水谷は苦笑いを返す。渡瀬の実家は貧しい農家であり、貧富の差はあれ中島と出は変わりないものだった。変わって水谷はそう高位ではないが、それなりに続く堅実な軍家である。

「親が貴族将官ならそれもあつただろうが、佐官程度なら掃いて捨てるほどいるから俺も大して変わらない」

水谷の父親は中佐だった。その言葉通り、軍家であれば父を佐官に持つものは多く、取り立てて優遇されるということもなかった。

優遇されるといえば、軍家でも貴族とよばれるもの達ぐらいであり、そういった人間は能力に関わらず停年通りに昇進していく。最短で数えるならば幼年学校で三年間学んだ後、士官学校予科で二年隊付教育と本科で二年半の間学ぶ。その後見習士官数ヶ月を得て少尉になる。若くすれば二十一で少尉になるが、三十五を超えてなるものもいる。

中島達は皆少尉であるが、同期でも貴族の出であれば今頃は二十一で少尉になった後、一年間の少尉定年を終え、三年間の中尉定年も終えたばかりの大尉のはずだ。

「同期で貴族の出なんて人いた？」問いかけたのは渡瀬。

「浅木大尉が同期だったと思う」答えたのは水谷である。

幼年学校も士官学校も同期である全員を覚えているなんて事はずない。問題を起こせば連帯責任ではあったが、それで記憶に残るのはよほどの問題児だけだろう。

「へえ、もう大尉なんだ……不公平というか理不尽というか、いつまでこういう体制は続くんだろうね」

肩を竦めて悪態をつく。無論そんな言葉を吐くのは今この場の中島と水谷という気の知れた人間しかいないからだろう。すっかりそ

んな言葉が誰かの耳に入ったとすれば、睨まれる事は火を見るより明らかだった。

「正直な話をすれば、今の状況で目立った昇進はしたくないな…」

…」

先日の騎兵隊との事を思い出して、つい口から本音が出てしまうしまったと気がついた時には当然遅かった。

「らしくない弱気な発言じゃない、何かあったの？」

「別にそういう訳じゃないさ、そういう渡瀬は昇進したくてうずうずしてそうだ。顔に出てる」

誤魔化す様に話題を向けると、渡瀬の下がった目尻がいつそう下がった。

「はは、そりゃあね……僕の家は貧乏なくせに家族だけは多いから、一応長男だし稼ぎは多いに越したことはないじゃない」

中島の記憶では、渡瀬には妹弟が五人ほどいた気がする。渡瀬や自分が今二十五歳だと考えれば、恐らく妹弟は育ち盛りばかりだろう。それは確かに家計を圧迫する…が、渡瀬は嫌な顔ひとつしないむしろ家族の話をする時の渡瀬は楽しげだった。

「それにこう言っちゃなんだけど、僕らが上に行こうと思ったら今は千載一遇のチャンスじゃない。戦争に感謝するわけじゃないけど、やっぱり平和が続いていたら昇進なんていつになるか分かったもんじゃないよ。軍人の給与がいって言うっても少尉じゃ限度が知れてるしね」

渡瀬の言葉には頷くしかない。戦争が始まっていなければ戦場に出ることもなく、同時に昇進もありえない話だっただろう。勿論軍にいる限りいつかは昇進もしただろうが、何年先になるかは分からない。そう考えるならば、戦果を挙げることが一番の近道に違いなかった。

「二人ともジャリア軍とは戦を？」

思い出したように中島は顔を上げる。

前回二人とこうして話をしたのは戦争が始まる前だったこともあ

り、現状について話すのはこれが初めてだった。忙しくて連絡を取ることすら間々ならない日々が数ヶ月続いたからだ。

「ああ、そうだよ。そういう話をしようと思ったのに忘れてた」
「うっかりしていたと渡瀬が頭を掻く。」

「僕は一応何度か交戦したよ。とは言っても中隊に連れられてだから僕が指揮を執ったわけでもなんでも無いけど」
「そう言い終えて水谷に視線を送る。」

「俺も渡瀬と同じだ」

簡潔に返事を返した水谷に頷いて、渡瀬の視線が再び中島に向けられた。

「中島も何度かやりあったって聞いている。戦争が始まって数ヶ月……正確に言えば四ヶ月と十四日経った。それで思っただけど、少し変だとは思わない？」

「変？」

鸚鵡返しに首をかしげると小さく頷きが返される。

「ジャリアが協定を抜けて、戦争を仕掛けてきたのが四ヶ月と十四日前の六月四日。それは突然だった……ように思う。でも本当にそれは突然だったのかな？水谷の父親によれば、真緒が軍備を整え始めたのは五月に入ってからすぐの頃だったらしいよ」

渡瀬はそこまで言って黙り込む。

本当に何の前触れもなくジャリアが協定を抜け攻め込んできたのが六月だったならば、真緒が五月初頭に軍備を整え始めた事に違和感がある。

「真緒はジャリアが攻めてくる事を予期していた……いや、知っていたと？」

「うん、その通りだよ。第一おかしいと思わないかい？何のいざこざも起こっていない中で、ジャリアが協定を抜けてまで戦争をしかけてくるなんて。気がついてから色々調べてみたんだけど、ジャリアが財政難になったとか、内乱があったなんて話は聞かない。至って平和だったんだ……国主が変わるまではね」

まっすぐに渡瀬の視線が向けられた。恐らく渡瀬の言葉に嘘や間違いはないだろう。幼年学校時代からそうだが、渡瀬は人一倍他国の動きに目を向けていた。元より他国に興味があったのだろう。

「そしてそのジャリアの国主が死んだのが、五月初めの事だった」
渡瀬が言葉を切る。それだけで十分に言いたい事は分かった。

ジャリアの元国主が死んだのが五月初め、それと時を同じくして整え始められた真赭の軍備。そして戦争が始まったのが六月四日。ジャリアの元国主の死は今回の戦争と関わっている。そう考えるのが自然ではないのか。

「理由がない」

無意識に口より出た言葉だった。

例えばそれが本当に関係していたとしても、理由が見当たらない。水谷も渡瀬も当然ながらそれは頭にあった。だからこそ返事は返ってこない。

しばらく続いた沈黙の後、渡瀬が大きく頷いて顔を上げた。

「うん。まあ別に真意を確かめるつもりはないんだ。僕達少尉がうんぬん言ったってどうしようもないんだしね。ただ少しは気をつけて行動したほうが自分の身の為じゃない」

はつきり言い切った渡瀬の顔には自然と笑みが広がっていた。水谷も中島も同じように小さく頷く。その後は久々の休暇を楽しむように幼年学校時代の話、最近の自分の話など全く関係のない話をし、日が暮れた。

第一話：戦場へ - 3

暗く明かりの落とされた室内で、一つの影が揺らめいた。

ジャリア国内でも、それなりに大きな貴族の屋敷だった。夜を迎えたそれは普段の輝きとは相反して、暗く明かりが落とされている。屋敷内でも起きているのは、この部屋の主であるレヴィン・アデインセルぐらいのものだろう。ジャリア国に多い銀の髪と緑の瞳をしており、長く伸ばされた髪は後ろで束ねられている。その顔つきは美しいものだった。切れ長な目に通った鼻筋、けれど何故か懐かしい様な親しみを覚えさせた。それは彼の内面から滲み出る優しさというもののなかもしれない。けれど今その表情は硬く険しいものだった。

勿論それにも理由がある。

彼は悪夢を見るのだ。真緒の一小隊と戦闘を行ったあの日、馬が兵が続けざまに倒れてゆき、鮮血が眼前を覆った。声もなく倒れた兵は目を開いたまま絶命し、その目だけが射るように視線をむけてくる。「退け」と声を上げれば、まだ息のある兵が手を伸ばし、「助けてくれ」と声にならぬ言葉で懇願された。けれど、それを当然のように……気づかぬ振りをして振り切り撤退したのだ。あの日よりずっと夜な夜な目が覚める。そして目が覚めた後には自責の念に駆られるのだ。

レヴィンという男は優秀ではあったが、軍人には向いていなかった。

幼い日より軍人となる為に育てられたが故、レヴィンは何の疑問も抱かずに軍人である父に言われるがままその道を選んだ。けれど戦果よりも兵の安否を気遣う事が多く、兵が死ねば自らを責める。無論将校は誰でも兵を気遣うそぶりは見せた。兵なくして隊は成り立たない。必要なときに動くように信頼は得ていなければならぬのだ。

が、レヴィンのそれは信頼を得る為でなかった。若さゆえか、まるで友人のように接することすら厭わず、自らの威厳など投げ捨ててしまっていた。軍人でなければ、貴族でなければ、誰かがそれを嘆く事もなかっただろう。だがそれを当然のように遺憾としたのは彼の父である。信頼を得る事と、威厳を投げ捨てて事とは大きく違うのだと何度もレヴィンに言い聞かせた。けれどレヴィンのそれが現在までに直されることはなかった。

レヴィンはまだ二十三であったが、貴族であるが故その若さですでに大尉であった。真緒には停年という制度があるが、ジャリアにそれはなく、貴族軍人の昇進は真緒のそれよりも早いのが通例である。階位が上がればその腕に預かるものが大きくなるのは当然だったが、彼にはそれすらも苦であった。人の命が自らの腕一本で左右される。何よりもその事実が恐ろしかった。

（情けない……父は勇敢であるというのに、たった一人の息子である私がこのざまだ）

情けなさに苦笑が浮かんだ。

自らが戦場に立つ事に恐怖はなかった。ただ自分の行動、発する言葉、命令、戦場ではその全てに部下の命がぶら下がっているのだと気がついた時、恐ろしくなったのだ。そしてあの日それは現実となった。

「……っ」

硬く目を閉じ、耳を塞ぐ。

聞こえなかったはずの声が、聞きたくはない声が、耳から離れなかった。

「止めてくれ……」

喉の奥から搾り出すように声が出た。まるで悲鳴のような声だった。

朝日が燦々と輝く中、小奇麗な庭を足早に行くひとつの影。

緩くウェーブがかかったふわふわと触り心地の良さそうな銀の髪が靡き、くりつとした大きな翡翠の瞳に薄い桃色の唇。細い手足は元より小柄なその体を一層華奢に見せた。娘の名はクラリス・アデインセル、レヴィンの実妹であった。

クラリスは誰もが認める美しさを持っていたが、十九になった今でも婚約者がいない。貴族であればもう婚約者は決まっていたもおかしくはない、むしろ結婚をしてもおかしくはない年なのだが、両親が何度その相手を紹介しても、クラリスは頷こうとはしなかった。

「お兄様！」

庭にその姿を見つけ、クラリスは声を上げた。その顔には満面の笑みが浮かんでいる。声に気がついたレヴィンは振り返って、クラリスに笑みを返す。ただそれだけの事がクラリスにとっては嬉しくて堪らなかった。

彼女がこの年になっても結婚を決めない理由の最たるものが、兄レヴィンの存在であった。幼い日からレヴィンという異性を目にしてきたせい、クラリスにとって他のどんな異性も魅力的には見えなくなっていた。容姿や性格、地位すらも兄レヴィンと比べてしまい、クラリスは頷く事が出来なくなってしまうたのだ。

「おはようございます、お兄様」美しく会釈するクラリス。

「ああ、おはよう。何かあったのか？」

「いいえ、御用という訳ではありませんわ。ただ今朝も朝食にお見えになりませんでしたし。ここのことろずっと元気が無いようでしたので……」

心配そうに眉をひそめたクラリスの頭を優しく労わる様に撫でた。妹にまで心配されていたのかと、レヴィンは心の中で反省する。その度にもっとしっかりしなければ、と思い直すのだ。

「クラリスが心配する事はない。大丈夫だよ」

出来うる限り優しくそう口にする。

「…大丈夫ではありませんわ、あまり眠ってもいらつしやらないようですし。それに私知っておりますわ、お兄様が元氣のない理由も…先日の戦が原因なのでしょう？」

じつと確信めいた顔を向けてくるクラリスにレヴィンは苦笑いを返した。おそらく使用人達が話している噂を耳に入れたのだろう。貴族の令嬢として過保護に育てられたクラリスには世間知らずな面があるが、屋敷内の噂にだけは耳が早かった。

「けれど大敗ではありませんわ、被害は少なかったと聞きました。それにお兄様ですもの、次は必ず大勝利をお納めになります！私が保障いたしますわ」

につこりと当然のように笑うクラリスに、やはり苦笑いしか浮かべられない。レヴィンにはその確証が無かったから、というものの勿論あつたが、それ以上に自分が再びあの場に立って平静を保つていられるかが分からなかったからだ。

「また…あの場に立つのか」知らず小さく漏れた言葉。

そんな言葉を漏らしたレヴィンの背中に手を回し抱きついた。クラリスはレヴィンの胸あたりまでしか身長がなく、その小さな体のせいで抱きしめるといふより、すがっているように見える。

「不安ですね…けれど誰だってそうですわ。失敗を恐れない人など何処にもいないはず…ただそれに立ち向かうか否かですわ。私の知っているお兄様なら絶対大丈夫…そうでしょう？お兄様」

背中に回す手に力が籠る。それはか弱い少女のもので、大した力もなかったが何故か離す事が出来ない強さを感じさせた。それはクラリスの口にした言葉の重みのせいだったのだろう。答える事も出来ず、レヴィンはただ黙ってクラリスの髪を一度だけ優しく撫でた。髪を撫でる掌を感じながら、クラリスは安心したように目を閉じる。

（お兄様を敗走させた人…私のお兄様に…勝った人）

どんな人物なのか、知りたいと思った。どんな顔でどんな性格なのか…会ってみたいとも思った。

クラリスが初めて兄以外の人物に興味を持った瞬間であった。

第一話：戦場へ - 4

その日は青空から日が降り注ぎ、十月だというのに暖かさを感じるほどの陽気だった。

こんな日が休日であれば気持ちよく昼まで自宅で布団を被っていただろう。だが生憎と休日ではなかった。書き上げたばかりの報告書を手に中島は鎮台を訪れていた。別段急かされた訳ではないのだが、いつまでも渋っているわけにもいかない。

足取り重く廊下を歩いている途中で、廊下の端に見知った顔が目についた。

見知ったと言うと何やら誤解が生まれそうだが、知り合いというわけではない。言うなれば誰もが知った顔だった。

澤村一衛大将、真緒の三大貴族の一つ、澤村家の現当主その人である。年は五十も半ば、顔には少しながら皺が刻まれており、丁寧に纏められた短い髪は白髪交じりだった。話の相手に目をやると、それもまた知った顔である。

大原志郎少将、澤村と同じく真緒の三大貴族の一つである大原家の現当主だった。だが澤村に比べるとその若さに目がいく。若いといっても三十半ばではあるが、三大貴族の当主である事を考えるのならばやはり若かった。実年齢よりも若く見える顔立ちに、短く切り揃えられた黒い髪。大原家は古くから真緒の国主である皇王家と付き合いがあり、三大貴族の中でも特別であった。前当主が病死した後、長男であるまだ若い大原志郎が後を継いだ、その関係に変化はなかった。

それをよしとしなかったのが澤村一衛である。階級の上ではまだ澤村が上ではあるが、実際そうとも言い切れない部分があった。だからこそよしとはしなかったのだ。澤村からするならば王家に近いという理由だけで、二十も下である若造の言葉が優先されるということ自体、憤慨する事実であった。

昔から澤村家と大原家の間には亀裂があつたと言われるが、大原家が志郎に代替わりした事により一層仲が悪くなった、などと噂にまでなっている。

そんな二人が仲良く雑談などという事はあるわけもなく、その雰囲気は重苦しいものだつた。

「例の話は聞いたかね？大原少将」

それは知っているだろうという断定的な問いかけだつた。

「澤村大将閣下、恐れながらこのような場所で話すような事ではないかと……誰が聞いているとも限りません」

静かな返事であつたが、それは低く諭すような音を持っていた。

大原のそんな様子に澤村は少しだけ目を開いてから、ニツと口の端を持ち上げる。

「これは、これは……大原少将は何か勘違いしておいでのようなのだ。私が言っているのは、先日開かれた中央会議の事なのだが？中央会議の話し合いは誰も彼もが耳にしているはず……それを『誰が聞いているとも限らない』とは、少将には何か聞かれたくない話があるのようだ」

馬鹿にしたような問いかけに、大原は黙って目を細める。

彼がもつと若かつたならば食つてかかつたかもしれないが、そんな愚かな事はしない。たとえその言葉が事実であろうとだ……。

「失礼いたしました。中央会議の事は私も耳に入れています」

何事もなかつたかのような返事。

「ジャリアの侵攻が今より本格化したならば、それに対する討伐の正当性が証明されるそうだ。真緒の正当防衛として」

言葉として発してはいないが、澤村の口は最後に『よかつたな』と動かされた。無論大原にわかるようにそうしたのだ。それを受けた大原の顔がサツと青くなる。

「ジャリアの進行理由はこれからも表に出ることはないだろうが……その首謀者が判明した時、皇王陛下はどうされるだろうか、貴殿はどう思われる？大原少将殿」

含みのある笑みだった。

大原は問いに答えず、一度頭を下げた後は逃げるように背を向けた。足取りは確かなものだったが、その顔色は真つ青であった。廊下の端で立ち尽くしていた中島は、突然向かってきた大原に敬礼を行うが、当の大原自身は視線を下に向けたままその横を足早に通り過ぎた。

中島には二人の会話は届いていない。そして下を向いたまま通り過ぎた大原の顔が真つ青だった事にも、気づくことはなかった。

その背を知らず見送っていた中島は、その姿が見えなくなると同時に首を捻った。何をそんなに急いでいたのか、会話は聞こえていないが様子を見ている限りでは、それは突然だった様に見える。そう考えかけて中島はやはり思考を止めた。自分が考えてもどうしようもない事だと思ったからだ。くると元の廊下に顔を向けると、もうそこに澤村の姿はなくなっていた。

十一月五日。ジャリアは総力を挙げて真赭へ侵攻する事を決めた。国境付近の鎮台には大軍が配備され、港には軍艦がずらりと並んだ。ジャリアのそんな様子はすぐに真赭他二国にも聞き届き、同時に今とは比べ物にならない戦が行われるという事を確信させた。

中央会議にて真赭の正当性を認める事を決っていた二国、フェンミルとウィーゴルもその事実に関心をもち、それは決定された。この日よりジャリアの一方的な戦争には終止符が打たれ、本当の戦争が始まったのだ。

「お気をつけて行ってらっしゃいませ」

屋敷を出る際、中島が使用人にかけられた言葉はそんなものだった。変化のないいつも通りの挨拶にふいに、彼女は現状を分かっ

いるのだろうか」と問いかけたくなった。

「…ああ、今回は北東の湾岸まで行かねばならないんだ。それなりに留守が長くなると思う…君も実家に戻るといい」

今回ばかりはいつ帰ることが出来るかもわからない。中島が今住んでいる屋敷は、親族の反対を押し切つて軍に入つた時に、親元を離れるという意味も込めて買ったもので、中島と使用人である彼女しかおらず、中島が離れることになれば世話をする相手すらいなくなつてしまふ。だからそう口にしたのだが、意外にも彼女は首を振つた。

「いいえ、私はここに残りたいと思います」

そうさつぱりとした口調で言う。

「いつ帰るかも分からないんだ、やる事がないだろう？ああ、勿論給与なら支払わせてもらう。君の不手際でこうなつた訳ではないんだから…」

「でしたら尚更、ここに残らせて頂きます」

今度はきつぱりと言い放つた。

「若様、家というものは手入れをしてやらねば直に駄目になってしまう。長くお留守になさるならば尚更に残らねばなりません。それに何もせず給与を頂くというのは私が嫌ですので」

薄く笑みを返してきた彼女に、中島は思わず目を丸くした。

もう何年もの付き合いになるが、たいした会話すらした事がなかったせい、目の前の女性がそんな風に笑うのだと初めて知る。美しいと呼ばれる者の様な華やかさはないが、年相応な可愛らしい笑顔であつた。

肩で切りそろえられた黒い髪は清潔感を漂わせており、穏やかな目は優しさを感じさせた。

「ああ、うん…では君…」

そこまで言つてはつとした。

彼女の名を呼ぶ事など一度もなかったからだろう、その名前が思い出せないでいた。眉をしかめて黙り込んだ中島の様子に気がつい

たのか、彼女が口を開く。

「お留守はこの佐野睦美にお任せ下さい、若様」

わざわざ自ら名を名乗った睦美に、中島は頭を掻いた。彼女は名を忘れているという事実には気づきながら怒りもせず、使用人として主人の威厳を損なわぬように言葉を選んだのだ。

（参ったな…これは本当に申し訳ないことをしたかもしれない）
今度帰ってきたのなら、気の利いた労いでもせねばならないなと思う。その前に帰ってこられるかが問題ではあったのだが、それはあえて考えないことにした。

「では、留守を任せる」

軍帽を少しだけ持ち上げて主人らしくない挨拶をする。

「お気をつけて」

深く頭を下げた睦美に背を向け、中島は歩き出した。

不思議な気分であった。決して軽い足取りにはならない。それも当然、今から向かうのは紛う事なき戦場なのだから。それでも気分は沈んでいなかった。

（おかしいものだ、騎兵隊とのやり取りで懲りたと思っていたんだが…）

あんな心臓に悪い場所には二度と立ちたくない。そうとまで思いかけていたにも関わらず、今は覚悟を決めている自分がいる。

不意に空を見上げた。反射的に眩しい光が視界を覆い目を細めた。真つ青な雲ひとつない青空が広がっている。

その空を眺め、暫くしてから再び歩き始めた。

第二話：第26大隊 - 1

北東に位置する港町誠栄はまだ雪が降っていた。

地面は薄く雪に覆われているが、多くの足跡がついたそれは綺麗とは言いがたい。鎮台に続く道に足を進めるたびにザクザクという足音が連なる。吐く息は白く曇り、手先や耳が冷たい。

それでも誰一人文句は口にしない。それは当然のことながら、中島は士官学校の時のようだと思った。文句を言おうものなら力一杯殴られる。それは今も何一つ変わっていないということだろう。それに加えて、この誠栄にある北東鎮台に配備される事となった第二十六大隊の大隊長は、厳しいことで知られている本条充であった。

一言で厳しいといっても色々あるだろう。言葉で諭す者もいれば、力で押さえつける者もいる。軍隊では主に後者が多いわけだが、本条も類に漏れずそういったタイプであった。

一九〇もある身長、一目で分かる程に鍛えられた身体、威圧感を感じさせる顔。その全てが、存在そのものが部下たちを萎縮させる。だというのに、中島は本条を恐ろしいとは思わなかった。

何故かと聞かれれば簡単な話で、本条は中島が恐ろしいと感じるようなタイプの人間ではないからである。中島が本当に恐ろしいなと思うのは裏の見えない人間だった。読めないのではない、全く見えない、見せない、そういった人間のほうが何倍も恐ろしい。それは中島が幼い頃からずっと思い続けてきたことの一つであった。

家柄の問題か、中島はそういった類の人間を多く見、関わってきた。だからこそ、それが何より恐ろしいのだと思うのである。つまり本条には計り知れないほどの裏はないと言う事だった。それは中島だけでなく、多くの者が感じていることでもある。

本条充。

両親はいたって普通の市民であり、言わば家柄だけで見るのであれば、それは渡瀬に近いものがあつた。当然ながら貴族のように昇

進が約束されているわけもなく、今現在42にして大佐である。

実力だけで成り上がってきた彼は完全な実力主義者であり、何の後ろ盾もない本篠にとって命令は絶対、その遂行こそが全てであった。そうして自らの実力と忠実だけで生きてきた結果、裏表のない只管に厳格な、一切の妥協を許さない本篠充という大隊長が生まれたのである。

だから、中島が最も恐ろしいと思うのは、本篠ではなく、士官学校で同期であった浅木武なのだ。ずっと出会ったときから中島はそう思っていた。

仕官学生時代から、浅木という男は自分を全く見せることがなかった。表も裏も、まるで何一つ感情がないかのように、淡々と全てを終わらせる。そして誰が見ても反論できぬ程に彼は天才だった。それはまるで感情のない機械のようで、それが中島にとっては恐ろしかった。

恐ろしいといえども、恐怖とは違う何とも言いえぬ感情である。それは今もまだ消えてはいない。おそらくこの先も消えることはないだろう。そして彼もまた中島と同じように第二十六大隊に配属されることとなっていた。大佐である本篠率いる大隊の中に、大尉である浅木率いる中隊、無論他にも中隊はあるが、その中隊の中に中島の小隊も入れられているというのが現状である。

大隊とは中隊を集めたもので、中隊は小隊を集めたものなので、そうなってしまうのは致し方ない。それでもやはり昔からウマが合わないのが変わるわけもなく、気分として最悪のものだった。特に各隊長というのはよく顔をあわせるもので、それがまた頭を悩ませる。どうしようかと考え始めて、やはり中島はそれをやめた。考えたところで仕方がないからだった。

そうこう考えているうちに、目的地である北東鎮台へと辿り着いた。

鎮台の中だというのに寒さに実が震えた。中央とここではかなりの気候の違いがある。中央ではまだ少し肌寒くなってきた頃だろう。このように雪に覆われているということもあるまい。中島はもともと中央で育った人間である為、寒さには不慣れであった。

（寒い……寒い……）

考えたところでどうしようもないのだが、頭の中で繰り返す。

寒気に身震いしながら、顔を上げると見知った姿が目映った。こちらを気にも留めていない様子で彼、浅木は歩く。やはりいうべきか寒さなど感じていないかのような顔をしている。

こういつときいつも思うのだ。彼に人間らしい部分はあるのだろうか、と。もしそれが見えないのではなく、元来ないものだったならば、それはとてつもない思い違いではないのかと……

（そんな馬鹿な）

思わずあきれたような苦笑いが浮かぶ。

人である限りやはり彼も「自分」というものを持っているだろう。だとするのならばそれは爪を隠した鷹である。浅木が鷹であるならば、自分は何なのだろうと中島はふと思う。

まあ本当にどうでもいい事ではあるのだが……どうでもいいのだが、浅木をよく思わない関係上、なんとなくすつきりしないのが本音ではあった。

「そんな所で何を変な顔をしている中島少尉」

気付かぬうちに百面相をしていたらしく、浅木が怪訝な表情を向けている。馬鹿にしたような目ではあるが、それはいつもよりずっと人間らしい態度ではあった。

「いえ、特に何もしておりません、大尉殿」

一応上司と部下なのだからと改まった返事を返す。

それを受けてすぐに普段通りの無表情に戻るあたり、やはり浅木は出来上がっているのだと思う。何が起ころうともそれを後に引かないのだ。冷静であり頭の切り替えが早い。生まれもって指揮官た

る資質を持っている、それこそが彼を天才とせしめる理由なのかもしれない。

正直な話資質だけで見れば本篠を凌いでいる筈だ。だがおそらく今は本篠のほうが上手く戦えるだろう。二人の絶対的な経験の差によつて生まれる現実的な結果である。

「ひとつ聞きたいことがある」

それは静かな問いかけであつた。

「十月二十日、少尉はある部隊と交戦したな？その部隊について聞きたいのだが……その者達は十字を掲げ、馬を駆り、銀の衣を纏っていたか？」

眉一つ動かさずにいい終えたその言葉に脳裏に焼きついた姿が思い出される。今日こそ死ぬかと思つたあの日だ。手と声が震えた。迫り来る音に声に体が震えた。

「確かに交戦した部隊はそれとされます」

それ以外に考えられなかった。

「部隊長を取り逃がしたと聞いている」

「その通りです。ですが恐れながら、部隊構成的に見ても、深追いは危険であり、壊滅を免れただけでも十分であつたと思われます」
本来であればこういつた言い訳がましい事を中島は口にしない。

思いはするが穏便に事を運ぶために意見はしないのだ。だが今回は相手が浅木なこともあり、つい口から出てしまった。

「だろうな……俺でもそうしていただろう」

不意に口調が「彼自身」のものになり、驚きに顔を上げる。表情に変化はないが、それは明らかに上司としての言葉ではなかった。無論情のある言葉でもなかったが……。

「ジャリアの大貴族、レヴィン・アディンセル。それが奴の名であり、今回の交戦部隊中隊長だ」

ハッキリと告げられたその言葉に、眩暈を覚えた。
まるで悪夢のようだと……自嘲を含んだ笑みが漏れた。

第二話：第26大隊 - 2

殆どの兵が前線に送られた頃、中央にて不穏な噂が流れ始めた。その噂の出所は定かではない。つまりは真実かどうかも分からないという事だ。けれどその噂によって何かが変ろうとしているのも事実であった。

中央に残される事となった渡瀬がそれを耳にしたのは、鎮台の廊下を歩いている時である。一番始めに耳に入れたのは今回の戦争が始まった理由についての噂であった。そこから始まり、聞けば聞くほどその内容が厳密に、まるでそれが真実だといわんばかりのものへと変っていった。

全ての噂を鵜呑みにするのであれば、こうなる……。

五月八日、ジャリア前国王が死んだ。その死因については伏せられており、知られていない。その理由こそが、今回の戦争の理由だというのがこの噂だ。

同日明朝、ジャリア国内においてある男が目撃されている。三大貴族大原家の私兵でもあり、陸軍少佐でもある鳥崎和之であった。それとこれと何の関係があるのかと言えば簡単だ。ジャリア前国王は鳥崎に殺されたのではないかと言う事である。その答えがはつきりしないのは、当人である鳥崎が行方不明になっているからだ。ただ、鳥崎とジャリア前国王の死を結び付ける要因はいくつかあった。

第一にジャリア前国王は国民からかなりの支持を得ており、その内情も問題ないと言って良いものだった事。つまり国民に殺されたと言う事は考えにくいという事だ。

第二に鳥崎がジャリアで目撃されているという事だった。

当日の入国記録に彼の名はない。隣国とは言え、その行き来には監査があり、その監査も優しいものとはいえない。だからと言って私的用途で監査を抜けてまで不法入国したとは考えにくい。特に親

類もない鳥崎がジャリアに行く事など考えられなかった。では何故…そんな彼がジャリアで目撃されたのか…その答えは一つしかない。

（それはちよつと…飛躍し過ぎているんじゃない？）

渡瀬はひとり首を捻った。

確かに考えられなくはないのだ。けれどそれは何かとても都合が良すぎるというか…そもそも話が上手すぎるようにしか渡瀬には感じられない。

（でも目撃されているのは本当らしい…だからこそ大原少将自身これを否定できないんだと思うし…じゃあ他に何か鳥崎少佐がジャリアに行く理由があつたとすれば？）

他に、例えば外交的要因だったとすれば…否、それはありえない。鳥崎は不法で入国しているのだ。外交的要因とは考えにくいだろう。では恋人や友人でもいたと考えるのはどうだろうか…否、それもまたありえない。

鳥崎が不法入国した際には、まだ戦争は始まっていなかったのだ。つまり不法に入国する必要など無かつたと言う事になる。

その入国理由が後ろ暗いものでない限り……。

（駄目だなあ…他に理由が思いつかない）

意図せず溜め息が零れた。

要因が見当たらない。だからこそ皆が噂を真実だと鵜呑みにしているであろう。

（でもやつぱり変だよ）

どうしても納得がいかない。何故かと言われれば答えは簡単だ。噂によって作られたシナリオが完璧すぎるからだ。

（鳥崎少佐がジャリアで目撃されているのは確かな話……ん？）

そこで小さな疑問が浮かぶ

（目撃って……一体誰が？）

大原が否定しない。それだけでその言葉は信じられるものだと思っていたが、その目撃者を知らない事に、噂にも目撃者については

語られていない事に渡瀬は気が付いた。

（目撃者が…ジャリア国民？でもそうなら鳥崎少佐の名前まで分からない筈）

大原の私兵とは言え、他国にまで顔と名前が知られるほど有名な人物ではない。偶然目撃したジャリア国民が鳥崎を知っていた……それでは余りにも出来過ぎているだろう。

（もう一人、真緒の人間がいた？）

頭に浮かんだのはそんな答え。

しかしその日の入国記録に真緒の人間の名はない。只一人もだ。

（おかしい話ではないかな？）

十分ありえる話だと渡瀬は思う。鳥崎が不法入国出来たと言う事は、他の誰かが同じ事をしていてもおかしくはないと言う事になる。

（そうすると話がややこしくなってくるなあ……今回の件に国王暗殺が絡んでるなら、国王を殺したのはむしろその『もう一人』の方だっ考えるのが妥当じゃない？）

が、例えそうであったとしても、その理由が分からない。ジャリア前国王を殺して、戦争を行なわせて得をするのは誰なのか、今回の戦争でジャリアは協定を抜けた。それにはデメリットしかないと思われる。それを考えるのであれば真緒の誰かが仕掛けたとは思えない。

（戦争が起きて得をする人間なんて、戦争屋か武器商ぐらいじゃないの？）

「つつわ」

一人悶々と考えに耽りながら歩いていた渡瀬は前を見ていなかった。

そのせいで恐らく前に立っていたのであろう人影とぶつかってしまい声を上げた。驚いて顔を上げると視界に移ったのは見た事のある顔であった。

「も、申し訳ありません！」

慌てて姿勢を正し、敬礼する。そうしながらも瞬間、頭の中に『

しまった』という言葉が浮かんだ。

「……」

男は何も言わずにじつと渡瀬を睨んでいる。

否、本人には睨む気などないのかもしれない。ただそう見えるだけの話だ。短めの髪は黒く、その目は細く鋭い。体格こそそう大柄ではないが、どこか威圧的な雰囲気を持っている。男の名は牧野浩司、澤村家の私兵である陸軍中尉であった。

「あ、あの……」

何の反応もない牧野に恐る恐る声をかける。

「何だ？」

黙っていた牧野が返事を返す。

その視線が向けられ、渡瀬は一瞬ドキツとした。睨んでいる訳ではないのかもしれないが、やはり真っ直ぐ目を向けられると恐ろしい。

「いえつ、私の不注意でぶつかってしまいました」

「もういい」

再び頭を下げようとした渡瀬を牧野は静かに止めた。その表情は先程と何一つ変わっていないように見える。が、その時渡瀬は悟った。牧野はこういう人柄なのだ。

「先程も謝った。二度も謝る必要はない」

さらりと述べられた言葉に渡瀬の悟りは確信へと変わった。誰からも怖がられている牧野も何一つ変わらない普通の人物なのだと思う。むしろ渡瀬を怒鳴り散らさなかった分、どちらかといえば穏やかな方だ。だとすれば外見というのは損をするものなのかもしれない、否それが軍人であれば牧野のそれは得をしていると言ってもいいかもしれないが。

「ありがとうございます」

思わず呆然とそんな言葉を口にした。

それに変な顔をしたのは牧野。どうして礼を言われたのか解らないといった表情であった。不謹慎ながら渡瀬は笑い出しそうになる。

なんて素直な人間なのだろうと思ってしまった。

「何をされていたんですか？」

先程の恐怖心はどこへやら、渡瀬は何とも気軽にそんな事を聞いてしまっていた。

「……話を聞いていた」

普通であれば『何故そんな事をお前に話さねばならない』と思うであろう。だが牧野は普通に返事を返した。呆れるでもなく、仕方がなくてもない。ただ問いかけられたから答えた風だった。

「話……例の噂ですか？」

さすがにこれを聞くのは渡瀬も一瞬ためらった。

けれど気がつけば言葉に出してしまっていた。普段であればそんな軽率な事をしない渡瀬だが、考えに詰まってしまった今、知らず何か情報が欲しくなっていたのかもしれない。

「あまり……その話はしない方がいい」

簡潔に述べられた返事はそれだけだった。

「え……」

思わず牧野に目を向ける。

それつきり黙りこんだ牧野の視線は渡瀬から外されていた。恐らく問いかけても先程の言葉の意味は教えては貰えないだろうと悟る。だから問いかけようとした渡瀬の言葉は途切れた。

（関わらない方がいい。これは進言……それとも忠告かな？）

後者なのであれば、牧野がこの件に関わっていると言う事を示している。

（牧野中尉が……違うな、この場合沢村大将閣下）

牧野自身がというよりは、澤村が関係していると思った方がいいだろう。そうすると少しだけ噂の真相が見えてきた気がした。

（澤村大将閣下と大原少将閣下……割と厄介な話かもね）

この時、渡瀬はこれから面倒な事になりそうだと直感していた。

第二話：第26大隊 - 3

中島は思わず身震いして目を覚ました。

あまりの寒さに目が覚めるなどとは思っても見なかった。まだ夜が明けていない事を確認して、再び眠ろうと毛布に包まるがどうにも上手くいかない。寒さのせいで目が冴えてしまっていた。

（意地でも寝なければ明日が辛くなる）

さすがに戦場でそれは如何なものかと思い、ぐっと目を閉じる。が、眠らなければと思う程目は冴えていくばかりであった。暫く努力はしてみたもののどうしても駄目で、しかたなく中島は目を開け天井を見上げる。やはりと言うべきか、不意に頭に浮かんだのは十字を掲げた騎馬隊の事であった。

（これだけの人数の中、会うとも思わないが）

自分に言い聞かせるような言葉が頭に浮かぶ。その言葉は確かに真実なのだが、ありえない訳ではない。だからこそこうして頭に浮かぶのだろう。

（アディンセル……貴族だったのか）

兵の事を考えるが故、非道になれず甘さが残った。中島が一度交戦した時にレヴィンに感じたのはそんなものだった。戦が下手な訳ではなく、甘さ故の敗走……そう見えたし事実そうだったのだと思う。だからどちらかと言えば本質的には本篠の様な人間かと思っていた。無論もう甘さなど残っていないであろう今の本篠と比べる訳にはいかないが……。

役にも立たない貴族。この場合浅木含め一部は当然例外的扱いになるのだが……、まあ中島が貴族軍人に持っていたイメージというのは、まともな戦も出来ぬ馬鹿ばかり……というものだった。

それだけにやはり驚きが大きかった。叶うならば戦場以外で話をしてみたいとまで思ってしまう。当然不可能な話ではあるのだが、不可能だからこそ尚更にそう思った。

（いや、案外戦場以外で話すと話が合わないのかもしれないな）
戦場だからこそその共感に近い興味を持ち、戦場だからこそ出会ったのだと思う。つまりそれが無ければやはりというべきか、相容れぬ存在なのだ。

（ではやはり……会いたくはないものだな）

なんて考えて知らず笑ってしまう。一人天井を見上げながら笑うなんておかしい話である。

（恐怖とは違うが、俺は死にたくはない）

今度は何も考えないように目を閉じた。すると不思議な事に徐々に眠たくなってくる。それだけ意識とは別に、体は休息を欲していたという事かもしれない。

中島は何となくではあるが、予感を感じていた。

今度会う時があれば…戦場の理どおり、どちらかが死ぬのだろうと…

誠栄での二日目の朝が来た。

相変わらず降り続ける雪は視界を濁し、吐息を曇らせる。

（寒い、寒い）

と思うのは中島。

寒さに弱いこの体質が簡単に変えられるわけもなく、整列しながらもその体は小さく震えていた。凍傷を起こさない為、先程から足踏みをしているわけだが、それは今の中島にとっては有難い。体の震えを少しでも誤魔化せるからだ。

（ああ……本当に、こんな場所で震えていたら勘違いされかねないぞ）

現状から考えるに、恐れによる震えだと勘違いされてもおかしくない。確かに戦場に立てば恐れに震えが襲うかもしれないが、今の

それは全く違う。そんな不名誉な勘違いをされるのは御免被りたかった。

「諸君！」

空を裂くような大きな声が上がる。整列した兵士の前に立つ、本條の声であつた。

「この度の戦争の理由は知っているだろう。否、知らずともいい！我らは皇王陛下の命に従い、自らの命を懸けてその目的をまっとうする事にある。我が第二十六大隊に与えられた任務は一つ、この誠栄にてジャリア国軍を迎え撃ち、勝利する事だ！」

本條はいい意味で軍人らしく、いい意味でそれらしくない。「命を持って命令に当れ」それは軍人らしい考えといえる。が、しかしだ……中島から見てもそれは「軍人らしい挨拶」ではなかった。

これは貴族の反感を買うのも伺える……などと思うが、それがどうしてか中島にとっては面白い。

（そうそう、それでこそ本條大佐だろう）

彼は貴族ではないのだ。そして中島も貴族ではない。少なからずそこには親近感というものが沸く。憤慨させるのならば、もっとさせてくれとさえ思ってしまった。

「諸君ら一人一人の活躍に期待する！」

短く簡潔なその言葉に、全員が揃って敬礼する。心の中ではどう思っているか定かではないが、それは見事なまでに綺麗に揃い、意気を上げるものとしては充分だっただろう。

事をやり終えた本條はさつさとその場を後にするが、中島達にはまだやる事が残っている。ここからが中島にとっては苦渋の時なのだから……。

「中島少尉」

後ろから声がかけられ、中島は「ほらきた」と思う。振り返り敬礼をする先には、当然のように浅木の姿があつた。

「第二分隊の軍議を行なう、分隊の各小隊長を連れて五分以内に軍議室に来るように」

それだけを言い残し、浅木は背を向ける。また面倒な役回りを押し付けられたものだと思う。一中隊には全部で四つの小隊がある。つまり中島他三名の隊長を連れてこいと言う事。しかもそれを五分以内にとくれば……文句を考えている暇など当然なく、中島は足早にその姿を探しに行く事になるのだった。

浅木中隊に配属された小隊長は中島にとってはあまり馴染みのない顔ぶれである。

浅木第二分隊の第一小隊長は中畑という男。これは何ともつかみ所のない人物で、表情の起伏は余りなく、普段は物静かだが、変な所で冗談めいた事を口にしたりする。

第二小隊長は岡北という男。これは中畑とは違って普段から五月蠅い男で、何かと話に野次を飛ばす。口から先に生まれてきたような男だった。

第三小隊長は松延という男で、中島含め他三名に比べて少し年齢が高い。それ故の穏やかさというのだろうか、ふわりとした柔らかい雰囲気をもっていた。

そして第四小隊に中島……言ってしまったえばそう、軍人らしくない……変な集まりの中隊であった。

第二話：第26大隊 - 4

余り好ましいとは言えない勢いで扉を開き、中島は息を付いた。浅木に言われた後、急ぎ他の三小隊長を集めて軍議室向かったものの、やはりというか当然のように五分などという時間は過ぎ去ってしまっていた。

「中島少尉、他三名只今参りました」

息を整えながらもそう告げる中島の後ろには、三つの影が三者三様の赴きで敬礼をしていた。

「五分を少し過ぎたが……予想の範疇だ」

さらにそう言って浅木は椅子に腰掛ける。

予想出来ていたのならばもう少し現実味のある時間を設定しろなどとは、思っても口にしない。それが上下関係というものだ。出来る限り顔色を変えずに、中島も席に着いた。

「質問いいですか、中隊長殿」

そう席に着かずに手を挙げたのは岡北。

「まだ何も言っていないが……何か、岡北少尉」

どこかの学徒の様な質問の仕方に、浅木が一瞥して冷たい返事を返す。まともな神経をした人間であれば、自分が酷く拙い事をしてしまったのだと、恐縮もしただろうが、生憎と岡北はそんな神経を持ち合わせていなかった。

「今回編成された第二十六大隊なんですが、こういった意図での編成なんでしょうか？」

思いもしない質問に、中島及びその場の全員が目丸くする。

「編成の意図？岡北少尉、君のその質問の意図を察しかねる。質問は簡潔で結構だが、要点を得てしまえ」

すぐに我に返って、浅木は静かに問う。不謹慎ながら中島としてはそのやりとりは面白いものだった。こんな質問は本来聞き流してしまえばいいのだが、浅木がどうしてかそれを許したのだから、中

島にとってこんな面白い事はない。

「今、真緒の軍事は三大貴族でもある澤村大将閣下が陸軍、大原少将閣下が海軍、菅野大将閣下が空軍を管轄していると思っただすが……俺の思い違いだったでしょうか？今回の第26大隊の編成は管轄である澤村大将閣下が決定したにしてはおかしいと思いません」

「……」

首を傾げた岡北に、浅木は押し黙った。

岡北の言葉通り、現在真緒の軍事は三つに分けられ、それぞれ三大貴族が管轄している。つまり言ってしまうはこの第二十六大隊も澤村の一声次第で、如何様にも動く事になるということだ。

が、だからと言って陸軍兵全てが派閥的に澤村なのかといえそれは違う。

（言われてみれば可笑しな話だ）

一人納得したのは中島。

酷く面倒な事ながらも、組織あれば派閥あり。当然のように三大貴族それぞれに派閥がある。その最たるものが其々貴族が持つ私兵と言えようが、派閥あれど確執は起こすべからず。例え澤村の私兵であれ、派閥であれ、陸軍に配属されるわけではないのだ。

（まあ当然か……それでは軍に偏りが生じる、内乱が起こった場合に酷く面倒な事になる、そんな事よりも気にかかるのは今回の編成だな）

押し黙ったままの浅木の二の句を待ちながら、中島は一人考えに耽る。

（澤村大将閣下は部隊に自らの私兵や派閥を絶対に組み込む人間だ……でも今回の大隊長は無派閥の本條。それだけならまだしも、中隊長の中にも派閥や私兵がいなくなると、おかしい。当然派閥の兵がゼロな訳ではないが、権力の薄い少尉以下を組み込んで役立たないだろうに）

澤村が自らの私兵を組み込むのは、その行動を自らが把握し、掌

握する為だ。だからこそ、指揮を持たない少尉以下しか組み込まれていない事に違和感を感じずにはいられない。

（いや、そうか……そもそもそんな必要が無かったのなら、納得出来るんじゃないか？別に隊を掌握するつもりなど無くて、ただその行動を把握できればいいと、そう考えるのなら、別段指揮など握っていなくても問題ない。むしろ……理由によっては組み込まれた人材が少尉以下という方が自然だ）

などと考え始めて、中島は眉間の辺りが痛くなってきた。我ながら嫌な事を考えたと思う。その考えが正しければ、恐らくこの大隊自体が捨て駒という事になるのだろうから。

「君がそう思う理由を明確に述べたまえ」

結局浅木は暫くして、差し障りの無い返事を返した。それに今度は岡北が押し黙る。

当然だ。もし岡北が中島と同じ様な事を考えていたとして、それを公言し、浅木が澤村に報告してしまったならば、岡北は間違いなく殺されてしまうだろう。だから悩んだ。口にすべきか、このまま何も無かった事にしてしまうかを……

宙を眺め、ひとしきり悩んだ後、結局岡北は前者を選んだ。

「今回編成されたこの大隊に、澤村大将閣下の私兵及び派閥兵は、各中隊に少尉以下が一名及び二名います」

「それが何だ？」

「澤村大将閣下の用心深い性格を考えると、正直今回のこの編成はありえません。これだと動かしたい時に自分の好きなように軍隊を動かせない」

岡北は意を決したのか、迷いの無い声で浅木に目を向ける。それに中島は素直に感心する。自分であればこうは言わない。否、言ったとしても自分の安全を確保できる状態を得てからだろう。

「岡北少尉、自分が何を言っているのかは理解しているか？」

ぴくりとも表情を動かさずに、浅木は静かな問いを岡北に向けた。その問いに首を振れば、まだ前言を撤回できただろう。だが岡北は

それをしなかった。浅木の問いに素直に頷いたのだ。

「元々この戦争自体おかしいですよ、突然ジャリアが協定を抜けた事も、それに対してすぐに軍備を整えられたことも……中隊長殿は何もないと思ってるんですか？」

ぼろぼろと岡北の言葉の端々に素が垣間見える。それを聞いて渡瀬と水谷との会話を思い出す。今回のこの戦争に一片の疑問も抱かずにいる人間はいるのだろうか？それが戦場に出る事になる軍人であれば尚更に。

（いや、軍人だからこそ抱かないのか……軍は民の為に在らず、国の為の存在。であれば、やはり疑問はタブーなんだろう。その疑問が心に芽生えたところで、普通はそれを口にはしない、が……岡北少尉は違ったか）

そう考えて、つい中島の口から笑みが零れた。咄嗟にばれない様、口を手で隠したが、どうやら浅木には気づかれたらしく、冷たい視線と目があった。

「澤村大將閣下を敵に回すと……君はそう言うのだな、岡北少尉」
それには流石の岡北も少し迷う。

返事が決まっていけないわけではなく、それを宣言するのが躊躇われた。確信を得ての言葉ではないのだ。ただ、そうである可能性が高いというだけの話。だから口を噤む。

「中隊長殿」

岡北に助け船を出したのは中島だった。

「澤村大將閣下がどうか……という話は作戦が終った後の話として、その可能性を踏まえた上の指揮はどうとられるので？」

少しばかり皮肉を込めたような言い方の中島に、浅木は一時考える素振りをみせて、すぐに顔を上げる。視線の先にいたのは中畑少尉である。

「中畑少尉、君の隊の青葉慶一郎上等兵だが、彼に不審な動きは？」

青葉慶一郎、それがこの中隊の中に唯一いる澤村の派閥兵の名だ

った。

「特に、ないと思われます」

落ち着いた返事を返す中畑。

それに静かに目を伏せ、浅木は何かを決めたように息を吐く。恐らく浅木は中畑に注意をするよう促すだろうと中島は思う。が、意外にも浅木の返事は予想と違ったものだった。

「君の隊には個別行動をとって貰う」

浅木の結論は、他の誰もが予想しなかったものだった。普通に考えれば戦力分散になる個別行動などさせる訳がない。小隊は人数にして四十名弱しかないのだから、自殺行為である。

「中隊長殿っ、いくら何でもそれはっ！」

当然ながら声を上げたのは中畑だった。

「だが、当然君の隊には最後方にいて貰う。青葉上等兵が何らかの行動を起こさぬ限り最も安全な最後方に、だ」

さらりと言つてのけるが、浅木の言葉の裏を返せば、青葉が何らかの行動を起こせば一番の標的になるという事でもあった。そんな事は誰でも分かる。だから納得するわけがなかった。

「俺達に犠牲になれと貴方は言うのですか？」

飄々とした浅木に、今にもくつてかかりそうな中畑が詰め寄る。

「岡北第二小隊と松延第三小隊は先頭を、その後には私を含む中隊本部。そして最後方に中畑第一小隊だ」

中畑に目もくれず浅木は一気に言葉を追えた。そこで皆目を丸くする。一拍後視線は中島に向けられていた。

「成る程、第二分隊は元より第三小隊までしかない」と

静かに笑つたのは松延少尉。意図を理解し皆が皆息を吐いたが、正直中島は面倒な役を押し付けられたな、などと思ってしまう。

第四小隊は解散である……あくまで形上。

「各隊の行動は追って各々個別に伝える。以上だ」

言つが早いか浅木は中島以外の三少尉を軍議室から追い出した。そしてここからが中島にとっての苦痛な時間の始まりとなる。

第二話：第26大隊 - 5

急に静かになった気すらさせる軍議室にウマの合わない二人だけ
が取り残される状態となる。これだけでも中島にとつては胃が痛い。

「それで、俺はどう動けばいいんでしょうか？中隊長殿」

「中途半端に敬意を払うぐらいなら、取り払え……別段必要ない」
溜め息混じりに聞けば、呆れた様な声で返事が返された。それを
よしとし中島は疲れた様子で椅子に背を凭れかける。

「どうして態々俺なんかにそういう役割を向けるかな、お前は」

「一番適任だ」

迷う事なく返された返事に、中島は眉を潜めて首を傾げる。

「何が適任だ。中畑は論外として、経験ならば松延少尉の方が上
だろう、俺には取り柄らしい取り柄もないぞ」

事実、歳の差から考えるに松延の方が経験は豊富であり、中島自
身も幼年学校での成績は悪くはなかったが、ずば抜けてよかったわ
けでもない。重要な事を預かるには荷が勝ちすぎるというのが中島
の主張である。

「お前は何の疑問も抱かなかったのか？」

「疑問？」

訳が分らないと鸚鵡返しに返事をする、浅木の口から溜め息
が零れ落ちた。

「確かに今回の大隊の編成はおかしい。少なくとも澤村大将閣下
が今まで崩さなかったやり方とは全く違う。だがな、澤村大将閣下
が、たかが少尉に見抜かれるような馬鹿な事をすると思うか？誰が
見ても明らかにおかしいと思う事を何の考えもなくすると思うか？
言われてみればそれはそうなのだ。」

中島自身もはつきりと断言できなかったのはそれがあるからであ
る。子供の嘘の様に分かり易いこの状況をどうしても素直に受け入
れる気にはなれなかった。

「まさか本條大隊長が裏で澤村大将と繋がってるなんて言わないだろうな？」

当然冗談で口にした言葉ながら、それが事実だった場合の事を考えて目眩がした。本條ではなくとも、他の誰かが澤村と繋がっているなどと、そんな面倒な事は考えたくはない。

「ないとは言い切れないが、可能性としては薄いだろう。澤村大將閣下にとって本條大隊長のような人物は動かしにくいはずだ。それに上手く隠し通せるような人間には見えん」

さり気なく失礼な事を口にしながら浅木は視線を手元に移した。宙に視線を漂わせたまま、確かに本條にそれは出来ないだろうと、中島も思ってしまう。どちらかと言えばそれに関しては浅木の方が上手く出来そうである。

「大隊長はないにしろ……他の誰かが繋がっている可能性は大いに考えられる。派閥や私兵ではなく、利害関係の一致だけで繋がっている人間がいるのだとすれば、それが一番厄介だ」

そこまで聞いて中島も浅木の考えが読めた。他の三小隊長に『各々個別に作戦を伝える』と言ったのも恐らくはそれを懸念してのことだろう。この厄介な役割を中島に押し付けたのも、澤村との繋ぎの可能性が皆無に近いからだ。

「解った、そこまでは理解した。だがどうして俺が澤村と繋がっていないだろうと判断した？」

声は浅木に向けるが、相変わらずその視線は宙を向いていた。先程から二人の視線が合う事は一度もない。

「本條大隊長と同じ理由だな、お前のような人間は澤村大將閣下にとって扱い辛い。あれは人の好き嫌いが激しい事で有名だ、態々六〇〇余も選択肢がある中で、お前を選ぶ理由がない」

酷く貶された気分になったが、中島自身それはそうだろうと納得してしまっただけで、何の反論もしなかった。

今回の大隊は、一六〇名程度の中隊が五つと大隊本部があり、総兵数六〇〇名程の規模となっている。その中からならば選り取りみ

どりな訳だ。

「成る程……それはいいとしても六〇〇近くも可能性があると、特定は難しくないか？」

「三〇程までにならずに絞れる。他派閥の人間や私兵を除き、後にお前や本條大隊長のような人物を弾いていく、それだけでもすくに一〇〇名前後にはなる」

事も無げに口にした浅木に、中島は目を丸くする。この口振りからするに恐らく浅木は岡北に言われるよりずっと早くその目星を付けていたようだ。

（そういえば、青葉上等兵の名前がすぐに出てくるのも可笑しな話ではあるな）

当然の事のように聞き流していたが、よくよく考えれば可笑しな話である。やはりと言うべきなのか、浅木は如何な状況においても冷静に状況を把握しているらしい。

（腹が立つほどに周到だな）

表情を変えずに中島は思う。

「澤村大将閣下、及びその派閥、私兵の動きを元に接触の可能性がある人物を絞り込み……後はその人物に注意を払うだけだ」

やはり浅木は簡単に言うが、言う程簡単な事ではない。

そもそも澤村周辺の動きを全て洗い出したと言う事が中島にとって信じられない事である。貴族だから出来た……それだけではないだろう。少なくとも浅木の情報収集が少しでも遅ければ、こつも自信のある答えは導き出せない。

「納得は出来たか？出来たのならさっさとお前への作戦行動内容伝えていたのだが？」

「ああ、とりあえず納得した」

片手をひらひらさせながら中島が答える。

「他三小隊の動きは先程皆に伝えた通りだ。中隊本部と中畑第一小隊の間にはある程度の距離を置く、雪で視界が悪い事も考慮に入れるが、区間的には二小隊程度の距離感だと思って貰えばいい」

ここが北部でなく視界と足場がよかつたならば、二小隊分の距離など対した事も無かつただろうが、恐らくこの地では前方の隊が見えるか見えないか……雪の具合によつては見えないであろう距離だ。足場が悪い事もあり、陣形を崩さずに動くには体力を奪われるだろう。

「お前の隊は、中畑第一小隊の右前方に着いて貰う」

「右前方？」

思わず変な声を出してしまったのは中島。

てつきり後方に着けとでも言われるのではないかと予想していたのだが、それに反して浅木の命はそんなものだった。

あれだけ念を押して中畑に最後方だと言つていたのだから、何かしら意味があるのかと思つたのだが……これでは本当に中畑第一小隊が最後方になつてしまふ。

「隊列を覚えているだろう、お前ならこの穴だらけの隊列を見てどこから狙う？」

言われて中島は少し考える。

（青葉が報告するとすれば、この陣形をそのまま報告するだろう。中隊本部と第一小隊の間に二小隊分の距離……それを聞いた上で攻撃を仕掛けるのなら、やはり手薄な中隊本部か……でもそうすると第一小隊との挟み撃ちを受けるな。いや、雪で視界は悪く、その上声も通りにくい、少数であれば本部を潰す事も出来るか？）

うんうん考えている所に、浅木が溜め息混じりの声を漏らした。

「失念しているようだから言うが、敵軍は前から当然仕掛けてくるぞ」

「あ、そうか」

浅木の言葉に思わず馬鹿な声が口から出た。

「だったら少数で本部を狙うな、本部を崩せば第二第三小隊を前方の軍と挟み撃ちに出来る」

やっと結論を出した中島に、納得したように浅木が目を伏せる。同時に何故右前方なのかという事も理解できた。隊列を組む地の

左側は川になっているのだ。季節柄、川は凍結し人であれば越える事も出来るが、馬や兵器で越えようものならば氷が割れてしまうだろう。この極寒の中で川に落ちれば一瞬にして心臓麻痺を起こす。だから右側なのだ。

「……騎兵隊が、来るって予想か」

小さな呟き。

「恐らくは…な。戦場での再会だ、死にたくないなら今度は確実に殺せ」

言うが早いか浅木は立ち上がり、それ以上何の言葉も掛けずに軍議室を後にした。

一人残された中島はやはり視線を宙に漂わせ、ただ一度だけ大きな溜め息を吐いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6245c/>

Confronts

2010年11月14日00時11分発行